

アムスメロンの生産安定と品質向上

第2報 育苗日数および着果節位の違いによる果実品質の変化

井手 勉・岡野剛健・五島一成（長崎県総合農林試験場）

Tsutomu IDE, Kunitake OKANO and Kazushige GORO : Productivity Stabilization and Quality Improvement of Ams Melon.

2. Effect of Seedling Sizes and Bearing Part on the Quality of Fruits

適正な育苗日数と着果節位とを明らかにするため、第1表に示した設計で試験を行い果実の品質を調査した。

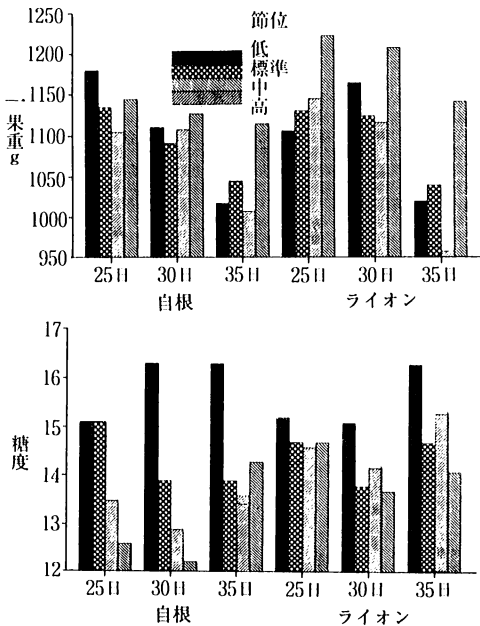
第1表 試験設計

項目	処	理
台木の種類	自根	ライオン
育苗日数	25日	30日 35日
着果節位	低 (7-9節)	標準 (11-13節)
	中 (15-17節)	高 (19-21節)

1. 試験結果

生育初期のつるの伸長は、自根、ライオン台木ともに育苗日数の短い25日苗が最も良く、次いで30日苗、35日苗の順であった。

第1図の上段に果実重を示したが、着果節位の1果平均重は、高節位に着果させた場合が低節位に着果させた場合よりも重かった。この傾向は自根よりもライオン台木でより明らかであった。



第1図 果実重と糖度

第1図の下段に示した果実の糖度は、概して、ライオン台木が自根よりも高く、高節位に着果させた場合よりも低節位に着果させた方がより糖度は高くなる傾向であった。この様に、高節位に着果させると果実の肥大は進むが糖度は低下する。したがって、果実の品質向上の

点からみると低節位に着果させるのが有利の様である。

また、収穫期の各処理区ごとに各葉位の葉面積を測定した結果では、低節位に着果させるといづれの葉位も葉面積が小さくなっており、特に、上位葉でこの傾向は著しく、低節位に着果させると葉面積の拡大は抑制される傾向がみられた。このことから、低節位着果が葉面積の拡大や果実の肥大を抑制し、果実糖度の増大といった品質向上に寄与していることがうかがえる。

さらに、収穫期に葉を下位葉（1～8葉）、中位葉（9～16葉）、上位葉（17～24葉）に分け葉位別の葉中の無機成分含有率および糖とでんぷん含有率のそれぞれと果実重および糖度との関連を調査し、台木の養分吸収特性を明らかにするとともに、果実の品質評価が出来ないか検討した。ライオン台木は自根よりも窒素とカリの含有率がいずれの葉位においても高かった。石灰の含有率は、逆に、ライオン台木が自根よりも低かった。このことは、ライオン台木は自根よりも無機成分、特に、施肥窒素の吸収能力が勝っていることを示している。反面、ライオン台木は窒素の増施によって果実の肥大は進みやすいが、糖度の低下につながる可能性をもっているともみられる。ライオン台木では、果実の品質向上を図るには果実肥大期の窒素の肥効を抑制する必要がある。

次に、収穫期の葉中の無機成分含有率と果実の品質との関連を調査した。第2表に示した様に、下位葉を除き、まご葉および上位（17～24葉）葉中のCaO含有率と果実の糖度との間には有意な負の相関が認められた。

さらに、30日苗の場合の各葉位別葉中の全糖含有率と果実の糖度との関連を調査した結果を第3表に示した。下位（1～8葉）葉の全糖含有率と果実の糖度との間には有意な正の相関が認められる。この結果は、収穫期の葉分析値から果実の品質を評価できる可能性を示す

第2表 葉中のCaOと果実の糖度との相関

葉位	相関係数
1～8葉	-0.350
9～16葉	-0.489*
17～24葉	-0.677**
まご葉	-0.639**

n = 24

第3表 葉中の全糖と果実の糖度との相関

葉位	相関係数
1～8葉	0.836**
9～16葉	0.542
17～24葉	0.471
まご葉	-0.188

n = 8

ものと考えら

れる。

以上の育苗

日数と着果節

位の試験結果

からは、展開

葉2～3枚の

若い苗を定植

し低節位に着

果させるのが

果実の品質向

上には有利と

判断された。